

2 野 菜

項 目	作 業 内 容
<p>(1) 果菜類の 管理</p>	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○果菜類の管理 ○いちごの育苗管理 ○台風・豪雨対策 <p>ア 高温対策</p> <p>夏場の雨よけハウスでは、ハウス内の温度が40℃を超えることがあり、株の消耗や花質劣化による着果不良が発生する場合があります。そこで、ハウスの側面や妻面などをできるだけ大きく開放し、換気を良くするとともに、古葉や混み合った葉は適宜除去し、通風の確保に努める。</p> <p>きゅうり、なす、ピーマンなどの露地果菜類では、株元に稲ワラや刈草を厚く敷き、地温の上昇や土壌の乾燥を抑制し根を保護する。</p> <p>イ かん水・追肥・摘果</p> <p>この時期のかん水は日中を避け、気温の低い朝夕に行う。</p> <p>追肥は、草勢を見ながら、窒素成分で2～3kg/10aを7～10日おきに施用する。粒状肥料の場合、土壌が乾燥していると肥効が現れにくいため、施用後に適宜かん水を行う。</p> <p>また、着果負担、高温、乾燥等により草勢の低下が見られる場合は、果実の若どりや奇形果（きゅうりでは極端な曲がり果や先細り果、尻太り果など）を中心に摘果を行い、草勢の回復に努める。</p> <p>ウ 摘葉（葉かぎ）</p> <p>トマトやきゅうりでは、不要になった下位葉や、発病葉、過繁茂の部分などを適宜除去する。なお、傷口からの病原菌の侵入を防ぐため、葉かぎは晴天日の午前中に行い、夕方までに傷口の乾燥を図る。</p>

項 目	作 業 内 容
<p>(2) いちごの育苗管理</p>	<p>エ 虫害対策 晴天が続くとハダニ類、アブラムシ類、アザミウマ類等の発生が多くなるため、早期防除に努める。また、8～9月にかけては、果実を加害するオオタバコガやハスモンヨトウのほか、ハモグリバエ類などの発生が多くなるため、ほ場をよく観察して防除を徹底する。</p> <p>オ 生理障害 土壌の乾燥が続いたり、窒素施用量が多すぎたりすると、カルシウムの吸収が妨げられ、トマトやピーマン等では尻腐れ果が発生しやすくなる。</p> <p>このため、かん水管理に注意するとともに、定期的にカルシウム剤の葉面散布を行う。</p>  <p>写真1 トマトの尻腐れ果</p> <p>育苗中期～後期は、施肥やかん水・葉かぎなど、基本管理の徹底により苗の充実を図るとともに、後半は窒素肥料を切って植物体内の窒素濃度を低下させ、花芽分化を誘導する。</p> <p>また、炭疽病を中心とした病害虫防除に努め、健全苗を養成する。</p> <p>ア かん水 天候と培養土の乾き具合を見て、苗が萎れない程度に1日に数回かん水する。自動かん水管理でも苗の状態に注意し、適宜手かん水を実施する。</p> <p>イ 窒素肥料の中断 いちごは低温・短日条件で花芽分化するが、苗の体内窒素濃度を低下させることで、花芽分化が促進される。</p> <p>窒素肥料を切る時期は作型によって異なり、無冷促成のポット育苗では8月中～下旬頃が目安となるが、ポットの大きさや育苗方法、品種等によっても異なるため、これらの条件に合わせて時期をずらす。</p> <p>なお、「紅ほっぺ」は、育苗終盤に極端に肥料切れさせると、本ぽで芯止まり株の発生が懸念されるため、適切な肥培管理を行う。</p>

項 目	作 業 内 容
<p>(3) 台風・豪雨 対策</p>	<p>ウ 小型ポットの根詰まり対策 小型ポット育苗では、育苗後半、ポット内に根が充満すると排水不良となり、根腐れや褐変が見られることがある。この場合は、一度ポットから苗を引き抜き、挿し直すと排水が良くなる。</p> <p>エ 病虫害防除 炭疽病、ハダニ類などは、定植までに防除を徹底し本ぽに持ち込まないように注意する。</p> <p>台風襲来やそれに伴う豪雨に備えて、この時期は特に草勢維持に努める。また、事前対策として施設の補強、防風網の設置、排水溝の整備を行い、しっかりと茎葉の誘引を施す。事後対策としては、ほ場内の排水を速やかに行う。豪雨被害を受けたほ場については、損傷した茎葉の除去や摘果、疫病・炭疽病・軟腐病等を対象に薬剤散布、液肥や尿素の葉面散布を行い、草勢回復を図る。なお、強風、豪雨時のほ場の見回り事故を起こさないよう危険回避に留意する。</p>



写真2 ポット底面に根が詰まった状態

(作成 農林水産研究所)